

# 町民文芸



## 只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

梅雨も開け猛暑となるも朝露に畑作物のみどり清しき

関谷登美子

線量を気にしつつ撰る山菜の楽しみそぎぬ原発の事故

小倉キミ子

娯楽など少なき村の老人ら雨の一日は寄りて茶を飲む

馬場 八智

親友が市会議員に立つと言ふに告示前より胸は高鳴る

新国由紀子

消灯後向かひの媪も眠れぬか細き腕上げ指折り数ふ

古川 英子

唐黍の実入りを待ちて鴉らの漁らぬうちにと網を巡らす

渡部ゆき子

欲得もなく姉弟らを守り来し兄も九十歳とぞ言ふも

五十嵐夏美

帰り行く友送り出し押車の向き変へやれば満面に笑む

目黒 富子

猛暑日に池に引きたる山水も絶えて地下水を出す日の多し

渡部ヨリ子

部屋替へに体拭くのみの一か月はじめて風呂に曾孫と入る

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

青空へ毛虫の垂るる無力感

順子

リウコ

螢待ち言葉つつしむ家族かな

見馴れたる青葉の山は捨てがたし  
夏椿吾が高齢にたぢろげり

寝返りの介護の重き夏の夜

修一

都

草刈や雑念を消し今日暮るる

夏野菜エンゲル数値下げて行く  
大豆時く今年は列を多目する

向日葵や朽ちて大小種子零す

一穂

味代子

残暑など知らぬ顔なり水の音

友逝って侘しき残る夏の雨  
散歩道一枚もらう月見草

遠き日の兄の草笛土の橋

敦子

恒夫

初生りの西瓜や家族みな揃う

越後嶺の夜空八月十五日  
裏山の墓石光りぬ稲の花

老鶯や散策の杖止めける

吉児

礼

青一天居久根を揺する蝉しぐれ

邦男

先生の往診時刻濃あじさい  
目のはしる放射線量夏わらび

礼